グローバル化時代の駒澤大学地理学科

グローバルな人材を育成するために、駒澤大学では様々な取り組みや学生への支援を行っています。ここでは、文学部地理学科における国際化に向けての海外研修プログラムと、そのサポート体制について、佐藤先生にご執筆いただきました。

［ご執筆］

「グローバル化時代の駒澤大学地理学科」
文学部地理学科教授　佐藤　哲夫先生

❶ 世界に飛び立ちたい学生のために

およそ20年前、私はホームページに次のような授業方針を紹介しました。「（卒業後の）仕事の舞台が世界に拡がっても困ることがないように、職業能力としてグレードアップされた地理的能力が身につくような授業を行う」。その当時は、地理学科の教員としては少しユニークな方針だったかもしれません。しかし社会の状況はそれから大きく変わりました。小売業や飲食などのサービス業でも海外に進出する企業が増えていますし、就職先として学生に人気がある観光業では、訪日外国人が大きな収入をもたらすようになりました。

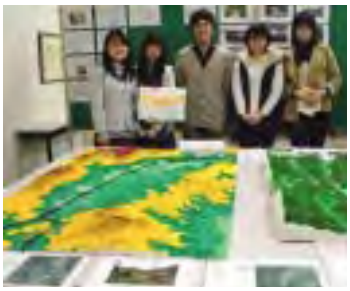
グローバリゼーションという言葉が日常的に使われている現在、大学にもグローバル化を意識した教育が求められています。そのような時代を迎え、駒澤大学の地理学科でも、専門的な知識や技術とともに国際感覚も身につけた学生を送り出すことができるように、積極的に支援を行っています。どのようなサポートをしているのか、一教員の個人的立場から見えることですが、ここで教育後援会の皆さんに紹介させていただきます。

❷ 原点となった海外研修プログラム

地理学科では平成20年から5年間、ＮＧＯと連携してタイの山村の学校で環境教育への協力を行っていました。その経験が現在のカリキュラムにも生かされ、サポートの原点になりましたので、少し回り道になりますが簡単にまとめておきます（活動の詳細については、外務省ＮＧＯ研究会の平成24年度報告書「ＮＧＯと大学の連携」74～82ページに掲載されています。ウェブ上で公開されていますので、そちらもご参照ください）。

そのプログラムでは、教員と学生が一人一軒ずつ3泊4日の日程で農家にホームステイしながら、村の学校の先生・中学生と一緒に川の水質調査などを行って、村の自然環境についての理解を深めました。また、さまざまな少数民族の生徒たちが通う学校でしたので、全校的な文化交流会も行っていました。その前後には、農村や都市でのフィールドワークもあり、全体で約1週間の海外研修でした。初めて農村生活を体験する下級生から、自分が学んでいる専門技術の社会的意義を改めて認識するリピーターの上級生まで、参加した学生全員が、建学の理念である「行学一如」の精神に即した実践的な研究、地理学的研究の応用の意味を実感したように思います。

このプログラムに駒澤大学側から関わっていた組織は、通称「北タイゼミ」と呼ばれていた課外ゼミで、地理学科と学内の応用地理研究所の協力を受けて運営されていました。課外活動という点では、学生から見ればサークル活動と同じ位置づけでしたが、学科教員の指導や研究所の支援があるという点で、普通のサークル活動とは少し違っていました。当時の地理学科のカリキュラムには、海外フィールドワークを正規の研修として認定するしくみがなかったので、研究所の研究グループに学生が参加しているという形にしたわけですが、それにともない、プログラムの教育的な効果を示す必要もでてきました。



（写真上）中学生と行う川の測量（北タイゼミ）
（写真左上）中学生と行う水質調査（北タイゼミ）
（写真左）大学祭での北タイゼミの研究発表

そのため学生たちは、公開研究会や大学祭などの場で活動成果を発表し、また報告書も作成してきました。その積み重ねが評価された結果、平成26年度には、レポートを提出することで海外のフィールドワークを単位認定する科目、「海外研究」が新設されました。そのような経緯を経て、地理学科の現在のサポート体制が実現したのです。

❸ カリキュラムでの国際化への対応

在学中に国際感覚を身につけるには、海外体験をすることが手近な入口でしょう。海外体験の機会にはいろいろなものがあります。語学研修や海外ボランティアのほか、短期のプログラムではスタディツアーなども一般的で、その場合は時期的には2年生の終わりの春休みか、3年生の夏休みが理想的です。長期では休学してワーキングホリデーや留学に行く学生もいます。いずれにせよ、海外体験を勉学や就職活動に活かすには、カリキュラムを意識した計画が大事です。地理学科では新入生に次のようなアドバイスをしています。

1年次には、専門科目で地理学の基礎知識を学びながら、身につけたい専門性について考え、卒業までの計画を立てることが求められています。留学や海外研修を含め、修学のことで分からないことがあれば、地理学科では実習のクラスによる担任がおりますので、気軽に相談ができます。

2年次からの専門科目では、フィールドワークという地理学の基本的方法を学ぶため、2年次で「地図学」が、3年次で「地域文化／環境調査法、演習」が必修になっています。地域の現状を自分たちで調査するフィールドワークでは、地図などで地理的な条件を確認しながら調べ、結果を地図に表現します。「地図学」では、外国の地形図や世界的に標準的になったデジタル地図についても学びます。海外地域について、文献に頼るだけでなく、地図や衛星画像を使っても知ることができるというのは地理学の強みです。語学力に少々自信がなくとも、海外でのフィールドワークが十分可能になります。

専門科目のなかでは、海外の地域研究法について学ぶ「地域研究論」が地域文化専攻の選択必修科目の一つになっています。選択科目には、外国の地理についての講義（「外国地誌」）や外国の地理について自分で調べる科目もあります。特色のある科目としては、海外体験で学んできたことを地理学的な観点からレポートにまとめる「海外研究」が開講さ

れています。2単位の科目ですが、在学中に4回までの履修が可能で、海外でのフィールドワークを意識した内容になっています。

3年生の10月には卒業論文（卒論）のテーマと指導の先生（ゼミ）を決めます。卒論は大学での勉強の総括であり、論文作成の過程を通して、大学の勉強が社会とどのように結びついているのか理解することを目標にしています。学生のなかには、海外旅行や海外でのボランティア活動に明け暮れた（？）大学生活のまとめとして、海外地域でフィールドワークをして卒論を書く学生もいます。

❹ 学生による海外フィールドワーク

海外でのフィールドワークにはいろいろなテーマのものがありました。最近の卒論で、ユニークな着眼点に感心したのは、格安航空を駆使したアジア旅行が趣味だったCさんの論文でした。彼は3年次に「那覇市の景観行政」というテーマの調査に参加し、卒論ではマレーシアの町で見られる看板に注目しました。マレーシアは多民族が生活している国で、店の看板もさまざまな言語で書かれています。ジョホール州のクルアンという町で各地区の店の種類や看板の言語を調べた結果、民族ごとの住み分けや、日本と同じような商店街の衰退を確認できました。この結果は応用地理研究所の紀要に発表されています。卒業後は日本の貿易を支える仕事がしたいと、国際物流を手がける会社に就職しました。

とても印象に残った卒論は、3年次までカンボジアでボランティア活動を続けたMさんの論文です。Mさんは支援活動をしていた村の生活と、活動の意義について調べました。調査が不十分な点もありましたが、学生生活の集大成になったように思います。卒業後、彼女は鉄道会社に就職しましたが、今も何かの形でカンボジアを支援したいという気持ちを持ち続けながら、電車の運転士になりたいという夢をかなえるために頑張っています。

Mさんの前の年度には、休学してワーキングホリデーでカナダに行ってきたTさんが、エスニックタウンについて卒論を書きました。働いていたレストランがある、トロントのポルトガル・タウンをフィールドにした論文でした。卒業後も、彼は博士課程まで進み、研究を続けています。同じ年、1年生の時から北タイゼミで活動していたYさんは、活動地域の水環境について卒論を書きました。彼女も大学院に進学し、修士課程修了後は地図会社に就職して、GISの専門家として活躍しています。

新しい科目の「海外研究」でも、さまざまなテーマで海外地域のレポートが提出されています。例えば、グレートプレーンズの地方都市での中心市街の形成と郊外の拡大、北タイ農村部での教育の普及、ボルネオ島における熱帯フルーツの季節性、デンマークの資源・エネルギー行政先進地での事業例、ベトナムの幼児・障がい者教育、タスマニア島の自然と環境保護、ベトナムと日本の関係、ブリスベン大都市圏の郊外地域などです。卒論のフィールドに海外の地域を選ぶのは少し敷居が高いようですが、海外体験で学んだことをレポートのレベルでまとめたいと思っている

水質調査をするMさん

Cさんが卒論で調査したマレーシアの看板

カンボジアでの現地調査指導

Mさんとカンボジアの村の子どもたち

学生は、少なからず確実にいるようです。

❺ 学生の関心と学科としてのサポート

今年度の地理学科新入生へのアンケートでは、少しでも留学に関心があると答えた学生は約半数に達していました。7年前の新入生アンケートと比べると、海外への関心はこの数年で急速に高まっています。ただし、具体的に留学を考えていると思われる、「強い関心を持っている」という回答は5％足らずですから、漠然とした関心にとどまっているようです。海外体験についての具体的な情報をもっと提供する必要がありそうです。

教員としては、学生の海外体験で一番気がかりなのは安全の確保です。最近では感染症の流行やテロも大きなリスクになっています。北タイゼミでは、現地事情に詳しいＮＧＯや危機管理のしっかりした旅行会社と提携することで、安全管理を徹底させていました。学生の自主的な海外体験に対しても、信頼のおけるプログラムの紹介や、海外安全情報や海外旅行保険の活用、海外での健康管理について指導するようにしています。

学生にとっては経済的な負担が大きな問題のようです。現在のところ、学生の自主的な海外体験に対して、大学が経済的補助をするしくみはありませんが、国際センターの短期語学セミナー（海外語学研修）は海外体験のよい機会でもあり、学外の同様のプログラムに比べて費用が安くてすむので、参加を積極的に薦めています。また、応用地理研究所では海外研究プロジェクトも展開していますので、そのアシスタントとして海外調査に参加し、その費用を負担してもらえることもあります。とくに意欲的な学生に対しては、海外体験を個人的に応援してくれる教員もいるかもしれません。

海外体験は、学生の就職先の選択など、目に見える結果にすぐに結びつくわけではありません。しかし、海外体験を通して、一人一人と海外地域とのつながりが深まり、それが日本のグローバル化を支える層の厚みをつくっていきます。その動きを少しでも促すことが、グローバル化時代の私たちの役割の一つだと考えています。

ベトナムの福祉施設でのボランティア

語学研修のホームステイ（オーストラリア）

語学研修のクラスメイトとラグビー観戦

オーストラリアの環境ボランティアでの海岸清掃

インドでの水質調査のアシスタント